

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00982

研究課題名(和文) 地域における神話的古代出雲像形成とその歴史的 성격の研究

研究課題名(英文) Research on the formation of mythical ancient Izumo image in the region and its historical character

研究代表者

大日方 克己 (Obinata, Katsumi)

島根大学・学術研究院人文社会科学系・教授

研究者番号：80221860

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：内山真龍がどのように出雲国踏査を行い、それがどのように『出雲風土記解』などに結実し、古代出雲像の形成につながっていったのかを、具体的に明らかにした。また出雲国風土記に記されている出雲国形成神話である国引神話が、近代において戦争と結びつきながら日本の国土拡大神話へと転化していった様相を明らかにした。さらに、出雲国からヤマトの朝廷に呼び寄せられ富麻蹶速と相撲を取った野見宿禰の伝承地がいつ、どのように形成され、顕彰されていったかを明らかにした。これらを通じて、出雲という地域と神話的古代像、神話的古代出雲像と歴史意識形成の様相の一端を提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

神話・伝説の伝承地の形成と神話的古代の実体化の一端を明らかできたことは、神話・古代とつながる地域の歴史意識の形成の問題を考えるためにも重要な成果である。その問題は同時に、歴史認識とは何か、歴史とは何かという根源的な問いでもある。その問いを通じて、現在の古代史認識を再検討し、新たな古代史像をつくるための基礎的な成果を示すことができた点に、学術的意義があり、また地域歴史像を見直し、今後の地域社会のあり様に対する課題を提示するという現代の社会に対する意義もある。

研究成果の概要(英文)：This Research clarified in detail how Uchiyama Matatsu conducted his research in Izumo Province and how his findings were reflected in "Izumo Fudoki Kai" and other works, leading to the formation of the ancient Izumo image. The paper also clarified how the myth of "Kunibiki", the myth of the formation of the Land of Izumo described in the Izumo-no-kuni Fudoki was transformed into a myth of the expansion of the land of Japan in modern times while being linked to wars. Furthermore, the author clarified when and how the legend of Nomi no Sukune who was summoned from Izumo to the Yamato court and wrestled with Taima no Kehaya, was formed and honored.

Through these studies, we were able to present an image of the region of Izumo and its mythological antiquity, a mythical image of ancient Izumo, and some aspects of the formation of historical consciousness.

研究分野：日本古代史

キーワード：出雲 神話 伝承地 歴史意識 出雲国風土記 国引 野見宿禰

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の核心は、神話的性格をもった「古代出雲」像が古代以降の地域社会の歴史の展開の中でどのようにして形成されてきたかである。それは単に「古代出雲」だけではなく、日本における王権(天皇)、神話、古代がどのように認識され、現代の歴史意識が創られてきたかを明らかにすることにもつながり、歴史とは何か、歴史認識とは何かという根源的な問いに迫りうるものと考えられた。以上が研究開始当初の背景である。

### 2. 研究の目的

『出雲風土記抄』『出雲風土記解』が与えた影響の全体像、およびそれら以降、さらには近代における風土記地名と地域の歴史意識、「出雲神話」と地域の神話的古代像の形成とその歴史的特質の解明を目的とした。

### 3. 研究の方法

『出雲風土記抄』から『出雲風土記解』へと展開する近世の風土記考証書、近世・近代の史料を収集、分析し、風土記地名と見在地とが結びつけられていく状況と過程、神話が付加され神話由来地が形成されていく状況と過程、それが地域の人々の意識として共有され、また各種言説として他地域(出雲以外も含めて)へも出雲の地域イメージとして広がっていく状況と過程を明らかにしていく。

### 4. 研究成果

上記の目的、方法に基づき得られた研究成果について、(1)内山真龍の出雲調査旅行、(2)国引神話の近代、(3)野見宿禰伝承地の形成の3点を中心に示したい。

#### (1) 内山真龍の出雲調査旅行と出雲風土記解の形成

##### 近世における出雲国風土記の研究、受容

出雲国風土記は、近世になって一般に知られるようになり、注解書も著されるようになった。そのなかで近代以降に至るまで、出雲国風土記の受容に大きく影響したのが、17世紀後半に成立した松江藩士岸崎佐久次の『出雲風土記抄』、18世紀後半に成立した遠江国の国学者内山真龍の『出雲風土記解』である。『出雲風土記解』は杵築大社に奉納された。その影響を受けた杵築大社千家国造家の俊信は、『訂正出雲風土記』を出版する。出雲国風土記の最初の版本であり、明治期に至るまで増刷を重ね、出雲国風土記の普及を決定づけた。

この『出雲風土記解』はまた『出雲風土記抄』の影響を強く受けている。『出雲風土記抄』は、風土記地名の多くを見在地と対応させていったことに大きな特徴がある。地方役人・郡奉行として、その職務の必要上からも領内をくまなく回っていた岸崎佐久次ならではの仕事だった。これは同時に、近世の村々、地域社会にとっては、その由緒が、風土記の古代、さらには風土記に描かれる神代にまでつながっていくことになるものであり、地域の歴史認識、古代像形成に決定的な役割を果たした。

『出雲風土記解』は、『出雲風土記抄』の地名比定を引用しつつ、新たな情報や独自の解釈を付け加えている。その前提となったのが、天明6年(1786)2月の出雲国踏査だった。それに先立つ天明4年(1784)、内山真龍は門人高林方朗らを連れて、伊勢・松坂の本居宣長のもとを訪ねている。そのときに高林方朗がその宣長所持の『出雲風土記抄』を写したと考えられる。

##### 『筑紫日記』の翻刻

真龍の出雲国踏査は、長崎まで足を延ばした西国旅行の途中に立ち寄ったものだった。門人の高林方朗・小国重年・鈴木文雄・山下政定に、真龍の母の弟で政定の父政嗣を加えた合計6人。彼らの旅日記として現在、真龍の『出雲日記』(浜松市立中央図書館所蔵)、方朗の『弥久毛乃道草』(浜松市立中央図書館所蔵)、政嗣の『筑紫日記』(皇學館大学附属図書館所蔵)の3点が知られている。これらの記述の比較、分析により、彼らが出雲で何を見聞き、考え、それが『出雲風土記解』にどのように反映したかの一端を明らかにすることができる。

『筑紫日記』は、これまでにいくつかの研究で言及されることはあったが、翻刻はされていなかった。本研究ではまず基礎作業として、上下2冊、天明6年正月21日の出発から4月15日の帰着までの全文を翻刻した。そのうち出雲国に入る直前の2月15日から石見国に入る24日までを、所蔵者の許可を得て島根大学法文学部山陰研究センター『山陰研究』15号に公表した。紙幅の関係で翻刻文をここに掲載することはしないが、すでに翻刻公表されている『出雲日記』、『弥久毛乃道草』および『出雲風土記解』とあわせて、彼らが出雲国内での調査、見聞の状況が明らかになった。次にその概要を示す。

内山真龍の出雲調査の状況

出雲国に入る前日、2月15日夜、米子・唐津屋に宿泊した一行は、神魂神社の秋上得国と出会う。得国からは、出雲国調査について種々の助言を受け、風土記に詳しいという松江藩士福見又八（藤原三省）を紹介してもらうこと、秋上邸に宿泊することなどを約して別れた。

16日は、米子を出立して出雲国に入り、意宇郡出雲郷の岸文蔵方に宿泊した。

17日は、出雲郷を出立して、秋上得国の助言に従って真名井神社、熊野神社などを参詣して、神魂神社の秋上邸に宿泊した。この間、『出雲国風土記』にみえる黒田駅や暑垣山について、見聞をもとに考察をしている。それらは『出雲風土記解』の記述に反映されている。

8日は秋上邸に滞在するが、約束通り松江藩士福見又八が訪ねて来て、終日風土記について言談している。福見三省の説は『訂正出雲風土記』にも引用されている。秋上邸では、『出雲国風土記』『出雲風土記抄』にみえる意宇川のウグイと十六島海苔で接待されたことを特記している。

19日は、秋上邸を出立して八重垣神社、玉作湯神社をめぐる、宍道湖岸を北上して松江を抜け、本庄に宿泊した。その間、『出雲国風土記』に記される正西道（山陰道）を探っている。

20日は本庄から船で出航し、まず美保神社に参詣した。その後、島根半島北側に回り加賀潜戸を目指す。激しい波風で転覆しそうになり、船を乗り捨てて、命からがら陸路本庄まで戻っている。『出雲国風土記』島根郡条では、島根半島をめぐる島々が多数記されており、それらを見聞しながら加賀潜戸に行こうとしたものだったと推測される。

21日は天候と疲労のためか、本庄から松江への移動だけで終わっている。22日には、松江から杵築へ移動するが、『出雲国風土記』に記す「枉北道」を見聞するため、宍道湖北岸の陸路を取っている。

23日は、午前中に杵築大社、午後に日御碕神社を参詣している。とくに日御碕と佐比売山（三瓶山）が南北関係にあることを確認したり、山の上から藪の松原（藪の長浜）を遠望し、「国引」の世界を実見している。

こうして24日には杵築を起って出雲国を後にし、石見国大森銀山へと向かって行った。

以上の彼らの行程や見聞内容を具体的に明らかにできたことが、成果の一つになる。この基礎的作業の上に、改めて『出雲風土記抄』『出雲風土記解』との対比、彼らの古代出雲の構築を明らかにしていくことが、今後の課題となる。

## （2）「国引神話」の近代 神話的古代出雲像と近代日本

### 「国引神話」とその世界観

「国引神話」は、『出雲国風土記』意宇郡条の冒頭に「意宇」の地名起源神話として次のように記されている。八束水臣津野命が、出雲国はまだ狭い未完成の国だとして、まず新羅の三埼を引いてくる。それが支豆支（杵築）の御埼、引いてきた綱が藪の長浜、固め立てた杭が佐比売山（三瓶山）である。次に北門の佐伎国から引いてきたのが狭田国、北門の良波国にから引いてきたのが闇見国、最後に高志の都都の三埼から引いてきたのが三穂埼（美保埼）、綱が夜見島（弓ヶ浜半島）で、固めた立てた杭が火神岳（大山）である。国を引き終えた八束水臣津野命が、意宇の杜に杖を衝き立てて「おゑ」と言ったので「意宇」という地名になった。

この「国引神話」が明治末期から昭和戦前期、出雲を日本に、海の彼方の地域を朝鮮、満州、さらには南方へと読み替え、大日本帝国拡大の神話へと転化していった。

### 転換点としての渋川玄耳『日本神典古事記晰』

1910年に出版された『日本神典古事記晰』は、「国引神話」と再話される日本神話体系にとって転換点として位置づけることができる。

渋川玄耳は、出版時、東京朝日新聞社の社会部長だったが、かつて陸軍法官として日露戦争に従軍した経験を持ち、従軍記を東西の朝日新聞などに寄稿している。なかでも「奉天会戦」は中学校の教科書にも採用された。

そのような渋川玄耳が、韓国併合直後に、古事記をもとにした子供向けの神話本として執筆、出版したのが『日本神典古事記晰』である。このなかで注目すべき点が2点ある。

一つが、「国引」の話の置き換えである。ヤツカミズオミツノが出雲国が小さいので海の方から国引をしてくる点は、『出雲国風土記』の国引と同じであるが、問題は引いてくる国である。まず「新羅の国（今の朝鮮）」を、次は「満洲の方に大分広い所が見えた」ので、それを引張って来る、さらに「東北の方を探して」引寄せて、今の出雲国ができあがったとする話である。最後に「明治四十三年に為って、彼ちぎり残りの朝鮮の全部が、遂に悉く日本に引かれて了ふことになった」と結んでいるように、明らかに韓国併合と重ね合わせ、満州へと拡大していく帝国の論理の神話的説明としての「国引」へと転化していることが見てとれる。

二つめが構成である。「国引」は出雲国風土記の話であり、『古事記』『日本書紀』の神話にはない。しかし『日本神典古事記晰』では、ヤツカミズオミツノをスサノオの四男臣角命としたうえで、「八岐大蛇」（スサノオの八岐大蛇退治の話）『日本書紀』神代上第八段一書第五をモチー

フにした話 - スサノオが朝鮮にいろいろと教える話と続けて、その次に「国引」を入れ、さらに『古事記』に戻って「裸兎」(因幡の素兎の話)などの大国主神の話、「国譲」「天孫降臨」へと展開する。この構成は、『日本神典古事記』以前の日本神話の本にはみえない。一方、この後は、同様の構成をもつ日本神話の本が多くなっていく。渋川玄耳によって古事記・日本書紀の話の中に国引を組み込んだ神話体系を創出されたといつてよい。

この構成の持つ意味は、国引による国土の拡大、拡大した国土の国譲り、拡大した国土を支配する天皇という論理である。まさに、近代天皇制と、大日本帝国の拡大の論理へと組み替えられていった神話体系を見てとることができる。

#### 昭和戦前期教科書の「国引」と大日本帝国拡大の論理

渋川玄耳の「国引」は、1924年の明治書院編『国文新選』2を皮切りに、中学校の国文教科書4点、さらに商業学校用国文教科書1点にも採用されていく。教師用の指導参考書『国文鑑 教授参考書』では、国力発展神話、日韓併合を思い合せた文として位置づけ、『商業国文新編 教授参考書』でも「日本帝国の発展はすでに三千年以前の神話に暗示されてゐることを述べてゐる」とし、韓国併合、帝国拡大を正当化する神話として指導することが期待されていた。

渋川玄耳の「国引」は、1936年の千田憲編『新編国文読本』第4版を最後に中学校国文教科書からは姿を消す。かわりに1934年から小学校の国定教科書に「国引」の話が採用され、1945年まで形を変えながら指導され続けていく。

それはまず小学校2年生用の『小学国語読本 尋常科用』3から始まる。1941年に尋常小学校が国民学校に改組されると、2年生用の国語教科書『よみかた』3、『ことばのおけいこ』3、だけでなく音楽教科書『うたのほん』下にも採用され、体育舞踏でも取り上げられるなど、複数の科目にわたり「国引」とその思想の指導を徹底する様に求められていった。

1934年の国語教科書では、国引の主体を「神さま」、国引される地を「東の方」「西の方」と抽象化し、国引によって継ぎ足されるのは「日本の国」としている。出雲の国引きから日本の国引、日本の国土拡大のための国引として再話されている。

指導書、小林佐源治『小学国語読本 新指導書 尋常科第二学年前期用』でも、国引と韓国併合、満州国の建設を直接結びつけた記述をし、指導を求めている。同時に、1920年代から児童書や子供向け神話本、児童劇などで繰り返し、韓国併合と結びつけた国引の話がつけられていったことと密接に関係する。

国民学校期の教科書『よみかた』も尋常小学校期の国語教科書を継承しているが、『よみかた 3 教師用』『うたの本下 教師用』では、「侵略」批判に反論し、拡大の正当化と「八紘一宇」の精神を強調し、その指導を求めている。

こうした状況のなかで、1933年島根県簸川郡東村尋常小学校編『郷土読本』、1934年島根県八束郡教育会編『郷土読本』など、島根県内でも小学校用教材として国引を取り上げていることが確認される。国レベルに対応して地域社会の中でも「郷土」の話として、拡大論理としての国引の再話と子供たちへの指導が図られていたことがわかる。

このように、韓国併合前後から昭和戦前期、1945年まで日本国家と地域社会のレベルで、帝国拡大の論理としての国引が再話され、子供たち、社会の中に浸透していった。そこには、国引を通じて、帝国の拡大と重ね合わせた神話的古代像が形成されていった様相を見てとることができる。

### (3) 野見宿禰伝承地、伝承空間と歴史意識の形成

#### 野見宿禰伝説

一つは『日本書紀』垂仁紀7年7月乙亥(7日)条に記されている。出雲から呼び寄せられた野見宿禰と当麻蹶速が角力を取り、野見宿禰は当麻蹶速の脇骨を蹴折り、腰を踏み折って殺してしまう。蹶速の土地が奪われ、野見宿禰に与えられた。腰折田という。以後、野見宿禰は天皇に仕えた。

また垂仁32年7月己卯(6日)条に、皇后日葉酢媛が死去した時に、野見宿禰の進言で、それまでの生人を埋めることをやめ、出雲から土師部100人を呼び寄せ、埴輪を作って陵墓に立てることにした。野見宿禰は土師氏の祖となって、土師氏は土師部を率いて天皇の喪葬に奉仕するようになった。

『日本書紀』とは別に『播磨国風土記』揖保郡日下部里条にも記されている。土部弩美宿禰(野見宿禰)が、出雲国と往来しているときに、日下部野で病死した。出雲国人たちがやって来て、墓山を作った。出雲墓屋という。

#### 野見宿禰伝承地の成立

以下のような『日本書紀』『播磨国風土記』にみえる伝承地、および野見宿禰を祭る神社が幕

末期以降に成立した。以下順に、成立過程を略述する。

(a) 野見宿禰の墓(兵庫県たつの市龍野町)

1882年、出雲大社の千家尊福が教職竹崎嘉通を龍野に派遣し、地元の粒坐神社社司関口啓之丞とともに龍野城西の台山の出雲塚(宿毛塚)で折れた剣等を発見し、野見宿禰墓だとした。その後、1903年に墳墓の修理、石門・石垣・玉垣・鳥居・参道などが整備され、大阪相撲若島権四郎一行による奉納相撲が行われるなど顕彰と神社創建の動きが進められた。一方、1911年に宮内省御用掛・内務省囑託の増田于信らの調査により龍野町日山の前方後円墳狐塚が野見宿禰墓として有力となった。龍野町は狐塚を野見宿禰墓として史蹟指定、整備し、出雲塚には神社を創建する方向で、政府への働きかけをするが、結局両者ともうやむやのままに終わった。狐塚は、1955年龍野高校グラウンド拡張工事のため取り壊された。事前の発掘調査では、相撲を取る人型の付いた装飾台付壺などが発見されて、あらためて野見宿禰伝承との関係が注目された。

(b) 野見宿禰神社(東京都墨田区)

野見宿禰墓の「発見」に引き続き、千家尊福が相撲協会の高砂浦五郎とともに、五条家と関わって相撲神社を創建した。千家国造家の系譜では野見宿禰は天穂日命の子孫で、出雲国造家の先祖にあたるとされていた。祭神論争の決着を受けて、千家尊福は出雲大社教の布教、拡大も目指していた。一方で東京の相撲協会も高砂浦五郎を中心に、幕藩体制と結びついた近世的体制からの脱却、変革を進めていた。こうした千家尊福・出雲大社教と相撲協会の歴史的動向のなかで、この時期の野見宿禰顕彰の動きを位置づけることができる。

(c) 野見宿禰・当麻蹶速の相撲の現場(奈良県桜井市穴師)

1915年『大和志料』下巻式上郡旧蹟のなかで、穴師坐兵主神社前の「タカヤシキ」が、野見宿禰・当麻蹶速相撲の地だと、はじめて指摘された。以後、奈良県の史蹟調査等各種調査等で踏襲されていく。根拠は、垂仁天皇の纏向珠城宮址に隣接することと、「カタヤ」が土俵内を指す語「方屋」に由来するという点である。しかし「方屋」は近世中期以降に吉田司家が相撲故実を形成するなかで作られた語であり、中世以前にはさかのぼらない。

とはいえ1928年には尾崎清風の働きかけで、相撲協会幹部、横綱常ノ花らによる相撲興行が行われ、現地を参拝するなど、相撲発祥の地として大きく顕彰されていく。1928年の顕彰は、東京・大阪の相撲協会が合併して大日本相撲協会(現日本相撲協会)が成立した直後である。ここでも相撲協会の動向とも大きく関係していた。

戦後も、1962年に地元桜井市・大三輪町、文芸評論家保田与重郎らの働きかけで、穴師坐兵主神社で「相撲発祥の地」としての顕彰大祭が、相撲協会理事長時津風を祭主として幕内全力士が参列して行われ、大鵬・柏戸の横綱土俵入りも奉納された。こうして、相撲発祥の地として認識されるようになっていった。

(d) 当麻蹶速塚(奈良県葛城市当麻町)

近世の『西国三十三所名所図会』に当麻真人国見の墓として描かれ、「當麻高田氏由緒記」には当麻為信の墓と記されていた当麻寺参道の五輪塔が、1937年に中尾方一らによって当麻蹶速塚として整備され、顕彰碑が立てられた。この時期には、大阪に国技館が建設され、相撲協会と関西の相撲の状況においても大きな動きのあったときで、ここでもまた両者の関係性が注目される。

(e) 腰折田(奈良県香芝市)

腰折田は近世の名所図会類では「所しらず」とされていたが、1911~13年にかけて奈良県の土壌調査や史蹟景勝地調査で、良福寺村石ヶ本515号の田地だと、具体的に場所が特定された。2017年に香芝市によって整備された。

(f) 野見宿禰出身地(島根県飯南町上赤名呑谷)

出雲国風土記にみえる飯石郡の野見野、その比定地である飯南町呑谷周辺を、野見宿禰出身地とするものである。近世・明治期の出雲国風土記の各種注解書には、野見野と野見宿禰を結びつける解釈はみられない。1931年の松岡静雄『記紀論究建国篇-師木宮』ではじめて野見野が野見宿禰の出身地だと指摘された。戦後、出雲国風土記研究に大きな影響を与えた加藤義成が、『出雲国風土記参究』のなかでその松岡説を引用し、さらに野見野を呑谷に当てた。この加藤義成の著述を通じて一般化していった。

地元の赤名地区では、相撲甚句の会がつくられるなど、野見宿禰ゆかりの地、相撲の里としての地域の意識が形成され、地域振興に大きく影響している。2018年には、野見宿禰赤名相撲甚句会が発起して野見宿禰顕彰碑が建立された。

(4) おわりに

以上、三点を中心に研究成果を述べた。そのほかにも、たとえば斐伊川ヤマタノオロチ神話由来地と地域の神話・歴史意識の形成、記紀神話と風土記体系の結びつけなどの点でも、いくつかの成果は得られつつあるが、これらをまとめ論文化することは、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大日方克己	4. 巻 18
2. 論文標題 近代教科書と再話される「国引神話」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会文化論集	6. 最初と最後の頁 173-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大日方克己	4. 巻 15
2. 論文標題 内山真龍の出雲国踏査 『出雲日記』『弥久毛乃道草』『筑紫日記』の整理	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山陰研究	6. 最初と最後の頁 19-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大日方克己	4. 巻 19
2. 論文標題 野見宿禰伝承地の形成と顕彰	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会文化論集	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 島根県古代文化センター編集（大日方克己分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 島根県教育委員会	5. 総ページ数 130
3. 書名 島根県立古代出雲歴史博物館所蔵 影印 出雲風土記鈔（雲州風土記）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------